

小売業の心意気を

山形商工会議所青色申告会会長
菊地 守氏



はからずも今年5月に山形商工会議所青色申告会の会長を仰せつかりました。会員の融和を第一に活発な「元気ある青申告活動」を展開していきたいと考えています。

青色申告会
は小規模事業者で組織されている納税者団体です。「正しい申告・納税を進めるとともに、個人事業者の立場から公正で公平な税制の創設を」と、日本が占領下にあった1949(昭和24)年、シャウブ勧告に基づいて誕生しました。

私どもの会は昭和48年4月に設立しました。ちょうどそのころマル経融資制度が発足し、山形市内にはデパートが大沼さんをはじめ7店もあり、商店街の賑わいの最盛期で、私たち個人事業者も元気いっぱいでした。初代会長は尾原儀助氏。そのあと工藤菊太郎氏、柿本昇太郎氏、青木幹雄氏、佐竹信義氏、船越高雄氏、阿部久左エ門氏、神保仁彌氏、矢萩紘一氏、そして前任の金山享二氏と山形の製造・小売業に携わってきた方々が会の発展に尽力されてきました。

私は32歳の時に入会しました。山形市の松波で酒類・たばこを販売している小売業です。それにしても当時は本当に忙しかった。少々自慢話めいて恐縮ですが、一般家庭から事業所、店近くの県庁、県警はじめとする公共施設、工事現場から注文が相次ぎ、届けて来てほっとひと息ついたと思うと注文・催促の電話。エレベーターがあまり備えられている時代ではなく、ジュースやコーラ、ビールのケースを汗だくで配達、腰がうれしい悲鳴を上げました。卸業者も同様で、空前のスキューブームで賑わっていた蔵王温泉の旅館、ホテル、ロッジには、トラックにビールケースを山と積んで往復しておりました。

しかし、現在はどうでしょう、まことに深刻な状況となっております。私と同業の酒屋、煙草屋をはじめ八百屋、魚屋、肉屋、荒物屋、果物屋といった「〇〇屋さん」が、いつの間にかまちの中から姿を消しています。まちの中心的存在だった店が、カーテンを閉めているのです。住む人も少なくなり小路に入れば、あちらこちらに空き家が。「店を開きお得意さんを迎え、御用聞きに歩いた私たち小売業が人々の暮らしを支えてきた」という自負は、郊外の大型店やコンビニに吸引されてしまった。息子たちに店を継がせたいと思っても、なかなか口に出して言えません。

私は現在、山形県たばこ販売協同組合理事長を務めています。先ごろ会議で鶴岡市を訪れ、銀座通りがシャッター街になっていることに驚きました。まちに人が住まなければ商店は店を閉じる、商店がなくなれば人はさらに外に移っていく。この悪循環を何とか食い止めなければ…。良き時代を知っている私たちの世代が、心意気を示してもうひと踏ん張り、ということでしょうか。

47人からスターとした青申会は2002(平成14)年に850人を超えました。現在は665人です。やはり個人事業者の廃業が影響しているようです。しかし、こうした状況だからこそ出合いを大切に、青色申告制度メリット、自然に親しむ会、ゴルフ大会、ビアパーティーといった会の活動を紹介し、会議所会員増強運動と一体となって仲間を増やしていきたいと思う次第です。

(菊地酒店店主。写真はサマーフェスティバルで「ひろえば街が好きになる運動」をPR。「山形市のたばこ税収は年間16億1千万円。吸う人も吸わない人も心地よい環境整備とまちづくりに使ってほしい」と語る)